



我國ニ於ケル「カルテル」熱ノ勃興

津村, 秀松

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 4(6):675-691

(Issue Date)

1908-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051264>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第四卷

第六號

(明治四十一年
六月一日發行)

論

說

我國ニ於ケル「カルテル」熱ノ勃興

神戸高等商業學校教授

津 村 秀 松

(一)

吾人ハ曩キニ本誌第四卷第四號ニ於テ「綿絲輸出獎勵金問題」ト題シ、大日本綿絲紡績同業聯合會ノ景品抽籤券付輸出獎勵法ヲ紹介シ、之レニヨリ現在並ニ將來ノ困厄ヲ脱センコト、到底望無キノ所以ヲ詳論シ、結局我國ノ紡績業ハ困難又困難窮策又窮策、七轉八倒シテ遂ニ「大日本紡績カルテル」又ハ「大日本紡績ツラスト」ヲ見ルニ至ルノ日アルベシ。之レ蓋シ紡績業ノ如キ大量生産ノ業種ニシテ、困厄屢々到ラバ、之ヲ完全ニ救済シテ大ニ其販路ヲ擴張シ、永久ニ其基礎ヲ安固ナラシムルノ策

ハ、究局スル所「カルテル」又ハ「ツラスト」組織ヲ措イテ、他ニ又良策ナキヲ發見スルニ至ルベケレハ也ト論決セリ。

果然、景品抽籤券付輸出獎勵法ハ殆ンド失敗ニ歸シ、内外ノ事情ハ遂ニ之ヲ中止セザルベカラザルノ勢トナリタルノミナラズ、更ニ五晝夜休業法ニ一步ヲ進メラ向フ六箇月ニ亘リ、夜業休止若クハ一部休臺ヲ協約シテ以テ、茲ニ純然タル「カルテル」ノ實ヲ現ハスニ至リス。

然ルニ我國ニ於ケル「カルテル」熱ハ獨リ紡績業者間ニ止ラズ、之ト相前後シテ更ニ精糖業者間ニ產額制限ノ舉起リ、人造肥料業者、花莖製造業者、花莖賣込業者、石油製造業者間ニモ亦各々共同販賣若クハ共同購買ノ議起レリ。之レ皆近時注目ス可キ我邦産業上ノ一大新傾向ニシテ、特ニ研究ノ價值アリト信ズレハ、綿絲輸出獎勵金問題ノ成行ヲ紹介スルト共ニ、左ニ其經過ノ大要ヲ縷陳セントス。

(二)

本年一月十八日、大日本綿絲紡績同業聯合會ハ輸出綿絲ニ對シ、景品抽籤券發行法ノ名ノ下ニ、一種ノ輸出獎勵金ヲ附與スルコトニ決セシガ、上海駐在各國領事ハ

之ヲ以テ純然タル富籤興行ト見倣シ、同地租界ニ於テ一切之ガ發賣ヲ禁止ストノ意ヲ洩セシカバ、紡績聯合會ハ同月二十八日急卒景品抽籤券發行法ノ一部ヲ改正シテ、

一、景品ハ現金ヲ以テセズシテ、物品(綿絲)ヲ以テスルコト

二、景品ハ一部ニ限ラズシテ、全部ニ交付スルコト

トナシ、以テ富籤興行ノ疑ヲ避ント試ミタリ。之ニヨリ上海方面ノ反對ハ表面無事ナルヲ得テ、景品付輸出綿絲ハ稍々賣行アルニ至レルガ如クナレドモ、更ニ香港方面ヨリ新反抗生ゼリ。乃チ香港商業會議所ハ英國各都府竝ニ天津上海等ノ同國商業會議所ニ飛檄シテ曰ク、英國商人ハ正當ノ手段ニヨル競争ヲ恐レザレドモ、福引券ヲ附スルガ如キ清人ノ射倖心ニ訴フルモノハ之ヲ不問ニ附スベカラズ。人爲的ニ日本貿易ノ隆盛ヲ圖リ印度貿易ニ損害ヲ與フルモノハ、當ニ外交上ノ手段ニ訴フルノ必要アル可シト。而シテ我國政府ニ於テモ夙ニ此舉ニ賛成セザルガ上ニ、斯ク屢々外商ノ反抗ヲ招ク以上ハ、命令ヲ以テ此ノ舉ヲ禁止セザレドモ、當業者自カラ進デ之ヲ中止スルノ寧ロ得策ナル旨ヲ、大阪府知事ヲ經テ注意セリト傳フ。

今ヤ景品發行輸出獎勵法ハ此ノ如クシテ四面楚歌ノ聲ナレバ、早晚中止ノ止ヲ得ザルニ至ル可シト雖モ、昨今綿絲ハ百圓臺ヲ破リ、輸出不振ハ略ボ世界共通ノ狀況トナリタル今日、默シテ止ムベキニアラズ。果然、產額制限法ハ更ニ百尺竿頭一步ヲ進ムルニ至リス。

四月九日、紡績聯合會ハ委員會ヲ開キ、一方ニ於テ夜業休止ヲ擴張スルト同時ニ他方ニ於テ一部休臺ヲ以テ之ニ代ルヲ得ルノ議案ヲ可決シ、越エテ十七日大阪商業會議所ニ於テ定期總會竝ニ協議會ヲ開キ、原案ノ通過ヲ見ルニ至レリ。今其決議案ヲ見ルニ、左ノ如シ

第一、上海綿絲商組合ノ建議ヲ容レ、二十番手以下ノ太絲ノ產額ヲ減少スルコト

(一) 五月一日ヨリ十月末日迄ノ間ニ於テ、會社ノ都合ニヨリ、三箇月間夜業休止ノコト

會社ノ都合ニヨリ、前項ノ休止ニ代フルニ、休臺ヲ以テスルコトヲ得ルコト

休臺スルモノハ、全鍾數ノ二割七分五厘以上ヲ六箇月間休臺スルコト

(二) 織機ヲ有スル會社ニ於テハ、輸出織物用ヲ除キ、内地用鍾數ノ内、相當ノ減鍾

ヲナスコト

(三) 前各項ノ規定ニ違反スルモノアルトキハ、一日一鍾ニ付キ金一圓ノ罰金ヲ徴シ、且ツ聯合會ヨリ除名スルコト

第二、五晝夜休業ノ件ハ、五月末日迄繼續スルコト

由是觀之、全國紡績會社ハ本年五月一日ヨリ向フ六箇月間、隨意三箇月間ヲ限リ夜業ヲ休止スルカ、然ラザレハ六箇月間全鍾數ノ二割七分五厘以上ヲ休業セザルベカラザルコト、ナレリ。扱テ此決議ニ基キ、各會社ハ如何ナル行動ニ出タルヤト云フニ、四月三十日現在運轉ノ太絲紡績ハ、織布及ビ撚絲原絲ヲ除キ、九十五萬七千三百八十四鍾ニシテ、内、五月一日ヨリ夜業休止ニ決セルモノ五萬七千六百六十四鍾、一部休業ニ決セルモノ殘額八十九萬九千七百二十鍾、其休業數六百五十六臺、其減鍾高二十四萬八千七百七十五鍾(即チ二割七分五厘ニ當ル)ト定レリ。斯クテ大部分ハ一部休業法ヲ選ビタルガ如クナレドモ、假リニ全部ガ夜業中止法ヲ選ビタリトセバ、現今二十手以下ノ太絲ハ平均一箇月約八萬捆ヲ出ス割合ナルニ、夜業ノ成績ハ全產額ノ約四割ト當ルベキヲ以テ、一箇月ニ三萬二千捆、三箇月間ニ九萬六千

桐ノ產額減少トナルベシ。又假リニ全部ガ一部休業法ヲ選ビタリトセバ、一箇月ニ二萬二千桐、六箇月間ニ十三萬二千桐ノ產額減少トナルベシ。而シテ目下他ニ増鍾ノ計畫多ケレバ、本年末ニ至リ、多少產額ヲ増加スベケンモ、今日ノ現狀ヲ以テセバ我國紡績業ノ全太絲產額ハ向フ六箇月間ニ約四十八萬桐ヲ出スベキ筈ナリ。サレバ全部夜業中止法ヲ選ビタルトキハ約二割ノ產額制限ニシテ、全部ガ一部休業法ヲ選ビタルトキハ約二割五分ノ產額制限トナル可シ。而シテ我國ニ於ケル細絲ノ產額ハ一箇月ニ約一萬桐餘、六箇月間ニ漸ク六萬桐餘ニ過ギザレバ、數フルニ足ラズ。乃チ今回ノ決議ハ其法何レニ出ルニセヨ、結局大體ニ於テ我國ノ綿絲產額ヲ五分ノ四乃至四分ノ三ニ減少スルモノト見テ差支ナカラシ。紡績會社ハ之ニヨリ人氣ヲ回復シ、絲價ヲ維持シ、殘品ノ處分ヲ解決セントスル也。

(三)

方今我國内地ニ於ケル精糖會社ハ次第ニ合併合同シテ、大日本精糖會社、橫濱精糖會社、神戸精糖ノ三社五工場ヲ剩スノミトナリシガ、今春來經濟界不振ノ爲メ、已ニ多少ノ打撃ヲ被リシ折柄、砂糖消費稅増徴ノ議現ル、ヤ、好機逸スベカラズトナ

シテ、三社共ニ全力ヲ舉ゲテ、之ガ見越製造ニ從事シ、少ナカラザル利益ヲ占メタレドモ、夫モ一時ニシテ、間モナク對清貿易不振ノ爲メ、在荷ノ堆積トナリ、生産ノ過當トナリ、糖價ノ下落トナリ、産額増加スルニ從テ、損失モ亦増加スルノ勢トナリタルガ上ニ、原料爪哇糖ハ近年珍シキ高値ヲ報ジ、該原料ニテ製造センニハ、今日ノ市價ニテ到底引合ザルコト明トナリタレバ一時ハ三社共ニ殆ンド製造ヲ中止セザルベカラザルノ窮狀ニ陥レリ。之レ到底三社ノ永ク堪ユル所ニアラザルベキヲ以テ何ントカシテ此難關ヲ切り抜ケントノ意向ハ期セズシテ三社ノ間ニ起リ、遂ニ本年四月十五日、大日本精糖會社ノ首唱ノ下ニ、三社協約シテ其産額ヲ制限スルコトニ決セリ。今其協約ノ内容ヲ示サンニ

第一、三社ノ月割精糖額ヲ左ノ如クニ一定スルコト

大日本精糖會社

二十、

横濱精糖會社

五、

神戸精糖會社

二、九

第二、毎月一回三社合議ノ上、市場ノ消長ヲ參酌シテ、前項ノ割合ニ準ジ、翌月ノ精

糖額ヲ改定スルコト

第三、本協約ハ五月一日ヨリ實行シ、五月分ノ精糖額ヲ左ノ如クニ一定スルコト

大日本精糖會社

二十萬擔^{ビコル}

橫濱精糖會社

五 萬 擔

神戸精糖會社

二萬九千擔

第四、毎月ノ精糖額中、若干ヲ割テ海外輸出精糖額トナシ、三社共ニ清韓輸出ニ向テ、提携努力スルコト

第五、前記ノ協約ニ違反スルモノニ對シ、次記ノ制裁ヲ加フルコト

(一) 協定破棄ノ場合ニハ、大日本精糖會社ハ三十萬圓、橫濱精糖會社ハ十二萬圓

神戸精糖會社ハ七萬圓ノ罰金ヲ課セラル、コト

(二) 毎月ノ生産制限額ヲ超過シテ生産スルモノアルトキハ、其超過額ニ對シ、各

社共一擔ニ付キ金三圓ノ罰金ヲ課セラル、コト

是レ也。方今、大日本精糖會社ハ一日約六百噸、橫濱精糖會社ハ一日約百二十噸、神戸精糖會社ハ一日約七八十噸合計一日約八百噸ノ生産力ヲ有スルモノナルガ、前

記ノ協約ニ從ヘバ、大日本精糖會社ハ一日約四百噸、横濱精糖會社ハ一日約百噸、神戸精糖會社ハ一日約五十八噸、合計一日五百五十八噸ノ製造額トナリテ、結果、約三割ノ産額減少トナリス可シ。三社ハ之ニヨリ内地ノ糖價ヲ釣上ゲ、之レヨリ得タル利益ヲ資ニ供シテ海外市場ニ見越製品ヲ一掃セントスル計畫ナルガ如シ。

(四)

一度ビ合同ヲ企テ、成ラズ、再ビ合併ヲ畫シテ敗レ、三度ビ賣價協定ヲ案シテ、其極遂ニ昨年十二月二十五日ニ至リ、漸ク過磷酸肥料ノミニ關スル價格ヲ協定シテ兎モ角モ茲ニ本邦人造肥料業上ニ「カルテル」組織ノ基ヲ開ケルモノハ、實ニ彼ノ大阪硫曹會社、攝津製油會社、大阪アルカリ會社ノ三社ナリトス。

然ルニ其結果ハ全然失敗ニ歸シ、當初ノ目的ハ愚カ、何等協定ノ實效ヲ奏スル能ハズシテ各社間ノ競争ハ依然猛烈ヲ極メ、秘密割引、販路爭奪等、到ル處ニ行ハレ、犯則處分ノ制裁アルモ願ルモノナカリキ。然ルニ昨年末ヨリ一方ニ於テ原料ノ騰貴工費ノ増加アルニ拘ラズ、相場ハ次第ニ下落ノ一方トナリ、收支相償ハザルニ搦テ加ヘテ、他方ニハ各社共ニ年々歲々高率ノ配當ヲ打續ケ至リシカバ、當局者ハ内

外ヨリ板插ミノ狀トナリ、困難一方ナラズ、爾來之ガ善後策ニツキ苦心慘憺ノ折柄
 昨今ニ至リ金融ノ一大緊縮ハ從來手形取引ナリシモノ、今ヤ全ク現金取引トナサ
 ザルベカラザル有様トナリ、苦痛ハ更ニ一段ノ重ヲ加ヘ、到底從來ノ成行ニ放任シ
 難キ事情トナレリ。

時恰モ宜シ、三井物産會社大阪支店ハ原料供給者ノ地位ニヨリ、三社ニ向テ共同
 販賣ノ利ヲ説キ、一致ノ行動ニヨリ時難ヲ救済スベキコトヲ勸告セシカバ、五月四
 日三社ノ代表者ハ合議ノ上、遂ニ次記ノ決議ヲ見ルニ至リス。

第一、資本金五十萬圓ヲ以テ、共同販賣所ヲ設立スルコト

第二、資本金全部ヲ重役ノ名義ニテ三社ノ間ニ分擔スルコト

第三、三社互選ヲ以テ共同販賣所ノ重役ヲ選定スルコト

第四、六月一日以後三社ノ製品ヲ共同販賣所ニ提供シ、一手ニ販賣スルコト

第五、三社トモ五月二十五日臨時株主總會ヲ招集シテ、前各項ノ議決ニ付キ、株主

ノ同意ヲ求ムルコト

而シテ三社ハ此機ニ乗ジテ、更ニ他ノ同業者ヲ勸誘シ、追テハ全國同業者ノ一大合

同ヲ企圖スベシト傳フ。

此外、越後ノ石油業者間ニハ已ニ前年ヨリ國油共同販賣所ノ設ケアルニ、近ク南北石油會社モ亦之ニ加盟セリト傳ヘラレ、又神戸ニ於ケル花蔴賣込商ノ間ニハ今ヤ共同購買所新設ノ計畫アリト稱セラレ、之ニ對シテ岡山ノ花蔴製造業者間ニハ共同販賣所設置ノ議アリト傳ヘラル。今其詳細ヲ知ル能ハザルハ遺憾千萬ナレドモ、畢竟ズルニ、近年我國ニ於ケル主要工業上ニ「カルテル」熱起リ、之ニヨリ或ハ產額ヲ制限シ、或ハ賣價ヲ一定シ、依テ以テ過剩生産從テ起ル價格切り下ゲ競争、同志打ち、從テ生ズル「其モ難儀」ノ困厄ヲ脱セントスルノ計畫頻々ナルハ、看過スベカラザル現象ナリト謂フ可シ。

(五)

上記スル所ニヨリ、吾人ハ最近我邦產業界ノ一大現象タル「カルテル」熱ノ大要ヲ知悉セリ。サレバ今ヨリ進ンデ其一般國民經濟ニ及ス影響ヲ詳論セントス。

元ト「カルテル」ナルモノハ主トシテ南北戰爭後ニ於ケル米國、普佛戰爭後ニ於ケル獨逸ニ於テ、戰後人氣ノ興奮ニ乘ジテ發生セル企業ノ勃興生産ノ過剩、競争ノ猛

烈、物價ノ下落、同業者ノ共モ難儀ニ基キ生ゼル救治策ニ外ナラズシテ、相互ノ競争ヲ避ケ、相互ノ利益ヲ増進セムトノ目的ヲ以テ業務ノ一部又ハ數部ニ亘テ、經濟的行動ヲ一ニセムトスル同種企業家ノ聯合ナリト謂フ可シ。サレバ南北戦争後ニ於ケル米國、普佛戦争後ニ於ケル獨逸ト同一境遇ニ臨メル日露戦争後ニ於ケル我が日本ニ於テ、亦同一ノ現象ヲ見ルニ至レルハ怪シムニ足ラザル所ナリ。況ンヤ方今國際貿易場裡ニ輸贏ヲ争フモノハ、最早ヤ個人ニ非ズシテ團體ナリ、一騎打ニ非ズシテ軍隊流ナルノ風アル以上ハ、我國ノ產業者モ亦一致團結、同心協力、其步調ヲ一ニシテ敵ニ當ルノ覺悟ナカルベカラザルハ、識者ヲ俟テ後チ知ルベキニアラザルニ於テヲヤ。

斯クテ「カルテル」起リ、更ラニ一進化シテ「ツラスト」トナルモノナルカ、今我邦ニ於ケル前記ノ諸新計畫ヲ見ルニ、一半(紡績業、精糖業)ハ同種企業家ノ聯合ニヨル產額制限ニシテ「カルテル」中、特ニ「生産カルテル」(Produktionskartell)又ハ一名「制限カルテル」(Beschränkendes Kartell oder Reduktionskartell)ト稱セラルモノナリ。而シテ他ノ一半(人造肥料業、石油業、花蒔業)ハ同種企業家ノ聯合ニヨル價格協約ニシテ「カルテル」中、特ニ「販

賣カルテル」Verkaufskartell（但シ共同購買ヲ目的トスルモノハ「購買カルテル」Einkaufskartell oder Bezugskartell ト稱セラル、モノナリ。即チ前者ハ供給ノ減少ニヨリ物價ノ下落ヲ防ギ、後者ハ賣價ノ協定ニヨリ物價ノ騰貴ヲ圖リ、依テ以テ其事業ノ安全ト繁榮トヲ企圖セントスルモノニ外ナラズ。

サレド一利一害ハ數ノ免レザル所ニシテ、利益ノ一面ニハ常ニ弊害ノ半面伏ス夫レ「カルテル」ハ企業家ノ聯合ニシテ、從テ生産者ノ團結ナリ。之ヲ以テ「カルテル」成立ノ後ハ生産者ノ地位從前ニ比シテ強キヲ加フルコト尠少ニアラザレドモ、之ニ對スル一般消費者ニ至テハ到底團結スル能ハズ。從前ノ如ク個々分立ナルヨリ、常ニ相手生産者ノ支配ヲ受ケ、壓制ヲ被リ、殊ニ保護貿易國ニ於テハ、外國ノ競争ナキヨリ、技術ノ進歩、機械ノ改良、生産費ノ減少ヨリ當然生ズベキ物價低落ノ利益ダモ遂ニ之ヲ享クルノ期ナカラントス。而シテ以上ハ是レ專ラ「カルテル」ノ「販賣カルテル」タル場合ノ弊害ナレドモ「カルテル」ニシテ一段ノ進歩ヲ遂ゲ「制限カルテル」タルニ至ラバ、餘弊ノ更ニ一層甚シキモノアル可シ。其故如何トイフニ、凡ソ物價ハ需要供給ノ理ニヨリテ定ルモノナルガ故ニ、需要ニシテ限リアルトキハ物價下落スル

ト同様ニ、供給ニシテ制限セラル、トキハ、物價騰貴ス可シ而シテ「制限カルテル」ナルモノハ、一定期間ニ於ケル各工場ノ生産力ヲ強テ縮小シ、依テ以テ各工場ノ生産額ヲ強テ減少シ、依テ以テ市場ニ於ケル供給ヲ強テ制限スルモノナレバ、物價ハ其故意ノ制限ノ度ニ應ジテ騰貴スベキハ火ヲ觀ルヨリモ明カナリ。斯クテ生産者ハ物價ノ自然ノ下落ヲ支へ、アツヨクハ物價ノ人爲ノ騰貴ニヨリ、多大ノ利益ヲ收メシモノ、爲メニ一段消費者ハ意外ノ損失ヲ被ムルニ至ルナルベシ。

「制限カルテル」ノ第二ノ弊害ハ、突然多數ノ失職労働者ヲ生ゼシムルコト是レ也。同種ノ各工場一致團結シテ、一時ニ夜業ヲ休止シ、若クハ運轉機械數ヲ削除スルニ至ラバ(即チ一部休臺)勢ヒ多數ノ労働者ハ解傭セラレザルヲ得ズ。夫モ西洋諸國ノ如ク工場法中ニ解傭豫告ノ制限アルトキハ、事不意ナラサル可ク、又失職保險ノ設ケアル場合モアレバ、慘害大ナラザルベケレド、此ノ種ノ規定モナク、又此ノ種ノ設ケモナキ我國ニ於テ、一時ニ同種ノ各工場ニ産額制限ノコト起ランニハ、一時ニ多數ノ労働者ヲシテ路途ニ迷ハシメ、其翌日ヨリ妻子眷族餓ニ泣テ、慘狀名狀スベカラザルモノアルニ至ラン。今回ノ紡績業者ノ「制限カルテル」ニ於テハ、向フ六箇月間

ニ平均二割乃至二割五分ノ生産制限ヲナスコトナレバ、毎年夏季ニ於ケル八十八夜ノ國歸リ、養蠶、田植等ニヨル自然ノ解傭ヲ差引クモ、尙ホ多數ノ勞働者ハ早晚失職ノ運命ニ陷ラザルヲ得ズ、殊ニ精糖業者ノ「制限カルテル」ニ至テハ、事頗ル不意ニ出タレバ、被害或ハ多カラシム。然ルニ彼等紡績業者竝ニ精糖業者ハ、後日産額復舊ノ際ニ於ケル職工收用難ヲ憂フノミニシテ、何等今日産額制限ノ際ニ於ケル職工ノ困厄ヲ顧ミザルハ、私利ニ汲々タルノ結果ナリトハイヘ、社會ハ之ヲ看過スル能ハザル也。

(六)

之ヲ要スルニ、今ヤ社會問題ハ二種ニ分レ、利害ノ調和ヲ其間ニ見シコト、頗ル難カラントス。曰ク

一、生産者ト消費者トノ利害ノ衝突

二、資本主ト勞働者トノ利害ノ衝突

是レ也。而シテ、其原因ハ一ニ全ク現在ノ如キ私有財産制ノ下ニ免ルベカラザル「生産力」Produktivitätト「營利力」Rentabilitätトノ衝突ニ歸ス可シ。夫レ生産力トハ財ヲ生産

シ得ル力ニシテ、營利力トハ斯クテ生産セラレタル財ノ交換ニヨリ利益ヲ收得シ得ル力ナリ。而シテ此ノ兩者常ニ相一致シ、生産力ノ増加ハ常ニ營利力ノ増加ヲ招キ、生産スル所大ニシテ、營利スル所モ亦必ズ大ナランニハ、公益ト私益ト相調和シ國民經濟上最モ望シキ所ナレドモ、事ノ實際ニ於テハ多ク然ラズ。生産力大ナルモ營利力小ナル場合アルト同時ニ(生産過剩ノ場合ノ如キ)生産力小ナルモ營利力敢テ大ナル場合アルベシ(生産制限ニヨル物價騰貴ノ場合ノ如キ)彼ノ所謂「制限カルテル」ナルモノ、如キハ、即チ這般ノ消息ヲ解シテ、殊更ラ生産力ヲ減少シテ以テ營利力ヲ大ナラシメムコトヲ期スルモノ也。於是乎、一面、物價ノ人爲的騰貴トナリテ、生産者ト消費者トノ利害ハ屢々相反シ、他面、勞働者ノ不意ノ解傭トナリテ資本主ト勞働者トノ衝突相亞デ起ル。蓋シ私利ニ基ク經濟組織ニ於テ、之ヲ避クルノ途ナキ也。

斯ク言ヘバトテ、吾人ハ之ヲ以テ直チニ私有財産制ノ破壊ノ理由トナスガ如キ我邦ニ於ケル一派ノ社會主義者ノ輕舉暴動ヲ學ブモノニアラズ。私有財産制ノ破壊スベカラザルハ、今更特ニ説明ヲ要セザルモノナルガ上ニ、「カルテル」熱ノ勃興ハ

現在ノ企業組織ト將來ノ國際競争上、到底免レザルノ數ニシテ、幾多ノ利益ノ之ニ
伴フモノアルハ否定スベカラザルノミナラズ、今日其數未ダ多シト稱スベカラズ
唯夫レ利ハ之ヲ利トシ、害ハ之レヲ害トシ、而モ其害ノ未ダ甚シキニ至ラザルニ先
チ之ガ救濟ノ策ヲ講ズルコソ、識者ノ正ニ努メザルベカラザル所ナリト信ズ。然ラ
ハ之レガ救濟策トハ何ゾ。絶對ナル放任主義ニモ非ズ、極端ナル社會主義ニモ非ズ
要ハ其中正ヲ得タル社會改良主義ニシテ、先ヅ其第一ニ着手ス可キモノヲ以テ、工
場法竝ニ勞働保險法ノ設定所得稅竝ニ相續稅累進率ノ改正ニアリトナス。斯クテ
一方ニ於テ勞働者ノ地位ヲ安固ナラシメ、他方ニ於テ富ノ分配ノ公正ヲ期センニ
ハ、冀クハ「カルテル」勃興ノ餘弊ヲ豫防スルコトヲ得ン。近時我國ニ於ケル企業界ノ
新傾向ハ、茲ニ期セズシテ社會改良主義實行ノ必要ノ上ニ、更ニ一段ノ重キヲ加ヘ
タルノ觀アリト謂フ可シ（五月十日記ス）